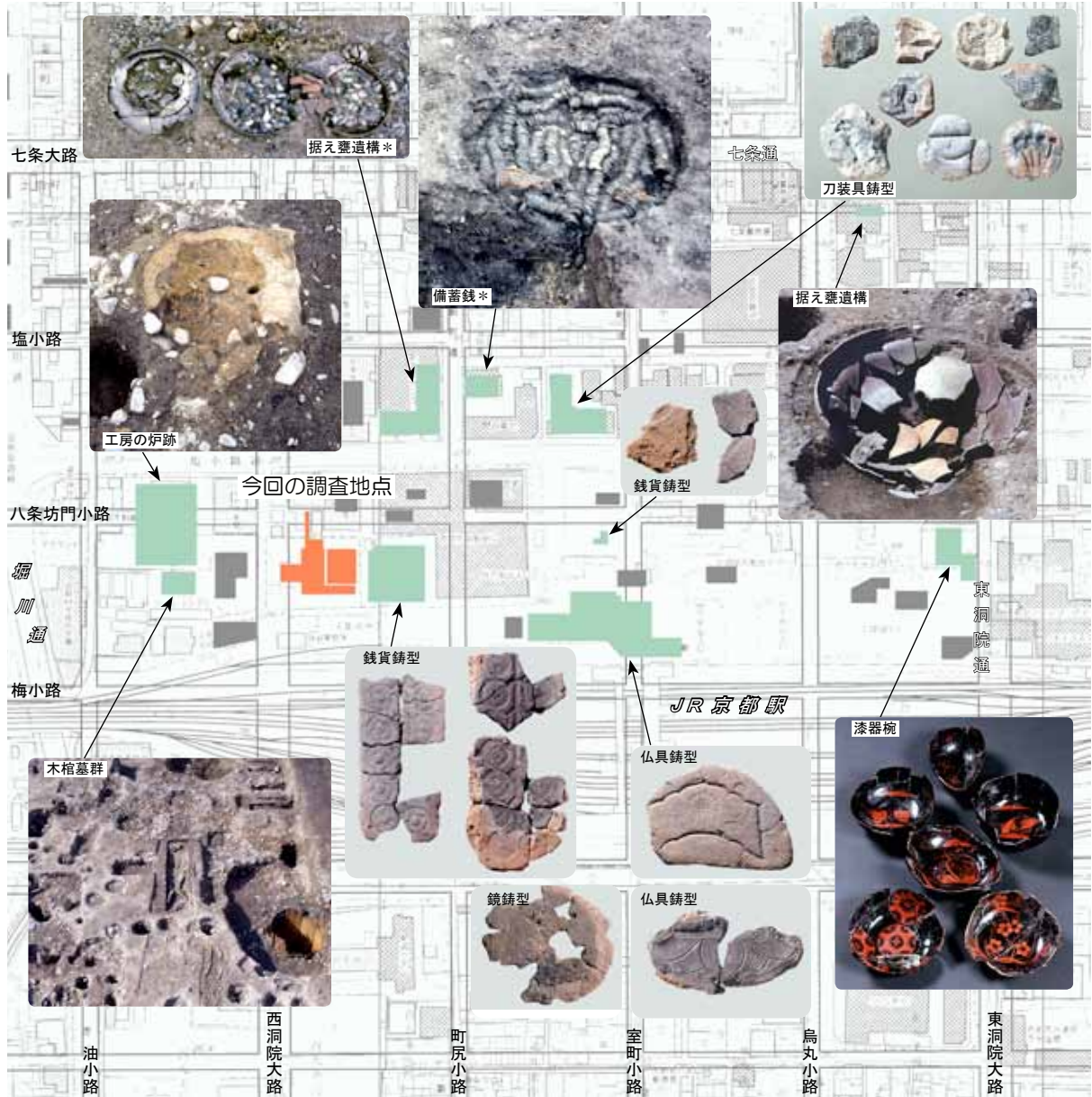


# 中世京都の賑わい -平安京左京八条三坊三町の調査-

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



京都駅周辺の調査位置図

\*の写真は京都文化博物館蔵

**中世の工業地域** 南北はJR東海道線と七条通、東西は東洞院通と堀川通に囲まれた地域は、京都駅を中心に発展し、開発がさかに行なわれています。それにともない発掘調査の件数も多く、調査規模も1,000㎡を越えるものが8件を数え、総面積は20,000㎡近くに至っ

ています。発掘調査によって、この地域には中世、特に鎌倉時代から室町時代半ばころにかけての遺跡・遺構が比較的密度も高く広がっていることがわかり、鏡・仏具・刀装具・銭貨の鑄型など、鑄物生産にかかわる遺物が広範囲にわたって出土

しています。とりわけ銭貨の鑄型については、「私鑄銭<sup>しちゅうせん</sup>」と言われるもので、その実体を知る上での貴重な資料となっています。その他、掘え甕遺構、炉跡、多量の漆器碗、地域の西側では土葬された墓も見つかっており、ここに住んだ人々の暮らしが注目されています。



写真1

今回の調査 1997年に行なった左京八条三坊三町北西地区の調査を紹介し、この地域について、もうすこし理解を深めてみたいと思います。

写真1には規則正しく並んだ穴がみえます。これは写真2・図1にあるような容量が200リットルを越える大きな甕を据えた穴です。この部分でも穴は20数基確認でき、水であれば4～5トン前後の量を貯蔵できる計算になります。この他にも写真3のような据え甕の痕跡や、据え甕の抜き取り穴群が数多く確認されています。鋳物の他にも染め物や醸造など、液体を扱う産業があったことがわかります。

写真4は石組みの井戸です。この地域では、板を井筒に用いた井

戸は多いのですが、石組みのものは少数です。据え甕遺構とも関連するものかもしれません。

写真5は、並びのある柱穴と礎石で、建物があったことがわかります。

写真6は、調査区の西端で見つかった西洞院川と思われる流路です。何回か改修、開削が行なわれているようで、盛んに利用されていた形跡がうかがえます。川がこの地域の産業と密接にかかわっていたものと思われます。写真の左に見えるのが現在の西洞院通です。

中世京都というと、上京・下京の発展が思い浮かびますが、この地域はそれを支えた工業生産地帯であったことがわかってきています。

(上村 憲章)



写真2

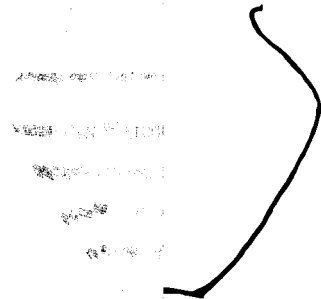


図1 写真2の常滑産甕  
最大径83cm 器高78cm



写真3



写真4



写真5



写真6